

〔課題報告〕

## 都市形態の変革期と都市社会の変革期

足利健亮

- I. 「画期」の束としての変革期
- II. 第1ステージに至る変革期
- III. 「変革期」考察の新視点

### I. 「画期」の束としての変革期

歴史地理学の主要な研究対象であり続けてきた都市について、その変革期をどうとらえるべきかというのが、報告者に与えられたテーマであったと理解する。そうであれば、まず何よりも先に検討されなければならないのは、変革期という言葉の意味内容であろう。

言葉は、共通の理解に至るための手段であるから、この際は、恐らく最も広く流布していると考えられる辞書『広辞苑』に語義を求める。それは次のようになる。

「変革。変わりあらたまること。変えあらためること。」  
「変化。(或る状態から他の状態へ)かわること。」  
「変容。姿形を変えること。姿形が変わること。」  
「変貌。姿が変わること。姿を変えること。」  
「変遷。移り変わること。移りかわり。」  
「変換。かえること。かわること。」

十分に予想されたことであるが、これらの語義の間には、一見、大きな違いはないように見える。しかし、注意深く読めば——というより、既に字義から予想される通り、変革という言葉は「あらたまる」という意味を含み、その限りにおいて、他の諸語とは一線を画さるべき特徴をもつ、といえるのではないだろうか。単に漫然と移り変わってゆくのではなく、次第次第に姿を変えてやがて変化し終えるというのではなく、急激に様相を一変するという意味が、変革という言葉には含まれるといわなければならない。

らない。

実際、時間は変化であり、時間を取り扱う歴史地理学はいつも変化を取り扱っているのであって、もし変化の過程について何がしかの限定を与えるのでなければ、あえて「変革期」の歴史地理などと言う意味がない。変革期という以上は、しつこく、この変革という言葉にこだわらなければならないのである。

さて、変革が上のように急激に様相があらたまること、様相をあらためることを意味するとすれば、それは言葉を変えれば、一つの「画期」を経ることが最低限の条件として必要であったということになるのではあるまいか。ただし、「画期」という言葉は、『広辞苑』に限らず、一般的に辞書に取り扱われていない。あるのは、「画(劃)期的」ないし「劃紀的」という言葉で、『広辞苑』はこれを「新時代を画するさま。新紀元を開くさま。画時代的。エポック・メイキング」などと説く。しかし報告者は、あえて「画期」という言葉を用いたい。漢和辞典によれば「劃」は「ワル。刀でつきやぶる。又その声」であるという。「期を割く」のが「画期」である。

「画期」を経ることによって、「変革」がもたらされる。ところが、歴史をふり返ってみれば都市の歴史地理という主題に限ってみても、「画期」はほとんど無数にあったといわなければならないだろう。では、それと「変革期」という言葉の間を、どのように整理するべきだろうか。

一言でいえば、「画期」が束をなす時期、あるいは群をなす時期を、「変革期」ととらえてよいのではないか。ある都市で、都市発達史上

の、あるいは都市の歴史地理学上の画期をなすような施策が実行されたり、出来ごとが起こったりして、地理学的な様相が一変したとする。その類似の過程が複数の、比較的多くの都市に続発し、比較的短い期間のうちに都市の様相が大きく変化をとげたということが、歴史上何度か指摘できるであろう。このような時間的・空間的の両義における「画期」の「束」、または「群」を、「変革期」ととらえようとするわけである。これは、報告者の提言と受けとってもらってもかまわない。構造線が断層（線）の束を指すことと、通じるところがあるのではないだろうか。

## II. 第1ステージに至る変革期

都市の歴史地理に関わる研究分野において変革期を考えようとする場合、少なくとも都市形態の変革期と都市社会の変革期に注目する必要があるだろうというのが、標記のタイトルを採った理由である。しかし、都市社会の変革（あるいは変革期）を探るのは、大変大きな、また難しいテーマであって、報告者は従来、このことについてほとんど仕事をしてきていないことを認めざるを得ない。ここでは、せいぜい都市形態にかかわる範囲での社会しか問題にできないことを自認せざるを得ない。

さて、報告者は、本シンポジウムの席上で、都市形態の変革期は、外枠と、細胞としての「町」の2点から、常識的ながら、次の3期が挙げられよう、と述べた。

- (A) 7世紀後半～8世紀——都づくりの時期
- (B) 15世紀末～17世紀初頭——城郭都市づくりの時期
- (C) 20世紀——工業都市およびそれ以後

ここで、(A)は、変革期というよりは、草創期というべきかもしれないが、ともかく、その中に(イ)「藤原京」期または「平城京」期、あるいは「藤原・平城京」期、(ロ)「長岡・平安京」期ほかの画期が考えられる。平安京時代の進行につれて、王朝都市・外港都市が発達し、鎌倉の成立に至るが、これらは「変容期」のものとし

て考えるべきではないか。

(B)に関しては、千葉徳爾の、『城塞都市』とは、形態的に市街地の全域が防禦施設の中に囲い込まれたものであり、内容的には、防衛者として武士以外の農民、商人、工人等、諸種の職業をもつ市民が、防禦戦において、武士に協力して施設に依拠して戦闘に加わるものである」との定義に、耳を傾けたい（「城塞都市の形成と挫折」）。このタイプには、(イ)吉崎（1471）ないし山科本願寺（1478）を画期とする寺内町の流れ、(ロ)岩槻（1583）・小田原（1583）を画期とする関東の城塞都市があり、それらをうけた画期としての(ハ)聚楽第城下町（1591、お土居建設）などがある。このあとを受ける伏見や江戸の位置づけについては、どう見るべきか。「町」についても、『後法興院記』明応3（1494）年7月6日の、烏丸・堀川・五条・四条間54町焼亡の記事に「両側町」普遍化の徴証を見る説があり、時期は並行する。

なお、上山春平『日本文明史1、受容と創造の軌跡』（1990）に、氏の所謂「1600年のエポック」を説明して、「江戸時代の何よりも重要な遺産は、日本列島の全域におよぶ都市化であろう。しかも、それが、戦国時代末期から江戸時代初期にかけて、年号でいえば、天正（1573—92）から慶長（1596—1615）ころにかけての約半世紀のあいだに、一挙に展開された点が、きわめて印象的である」とする文章がある。これに対して筆者は、「全域の都市化」という表現には問題があり、これはむしろ20世紀の変革期にかかわって用いられるべきとらえ方ではないか」という内容のメモを提示した。

シンポジウム当日の上記メモは、卒直に言って赤面を禁じ得ないほどの粗雑なメモであり、従って発表内容であったが、いま若干の弥縫を構じて、この場の責をふさぐことにしたい。

変革期を3期と見ようとしたのは、その前提として、わが国の都市の発達過程、あるいは変化の跡をたどれば、これを大きく3つのステージとしてとらえてよいのではないかという考えがあるからであった。

第1のステージは、整形・方格の外枠と街路網を持った都が都市を代表するステージである。この時、「町」は四辺を街路で囲まれた存在形態を示していたと見ることは、一応共通の理解であるといつてよいであろう。そしてこの時、都市住民は簡単にいえば公卿、百官、あるいは「百姓」、すなわち現代ふうにいえば公務員であった。職人も宮廷工房に勤め、市人も官市に関わる以上、公務員と呼んで差し支えあるまい。

このステージの成立に至る画期の束をどうとらえるかということは、すこぶる難題といわなければならない。「町」の呼称にしても、藤原京における「小治町」の例が指摘されているにもかかわらず、平城京でははじめ「坪」呼称が用いられ、途中段階で「町」呼称が取り入れられたという「画期」がある。藤原京がもし大藤原京であったのならば、平城京の成立は、少なくとも外枠の拡大という意味では「画期」をなさない。また、主軸方位が正南北方位をとることも、このステージの特徴のうちであるが、そういう特徴をもつ都の成立はどこに求められるのかという問題もある。

そもそも平安京の成立までを第1のステージを生み出す変革期ととらえるならば、何のことはない都づくりが行われていた間はすべて変革期ということになるわけで、はたしてそのように大まかなことでよいのかどうか。国府が方形・方格都市であったという概念は、いま大いに揺らいでいるから、ここではそれを除いたが、それにしても、少なくとも大宰府や「多賀城を核とする都市空間」をどう見るかという問題は、含みこんで議論されなければならない、という批判もあり得よう。第1のステージとそこに至る変革期の問題一つでも、このように論じられねばならぬテーマがつきないのである。

### III. 「変革期」考察の新視点

しかし、もっと問題なのは、第1のステージから第2のステージに至る変革期を、どうとらえるかという点であろう。報告者は第2のステージを、武士社会かつ町衆社会の都市のステー

ジとイメージした。にもかかわらず、そこに至る変革期を、あえて城郭都市づくりの時期と設定した。

第2のステージを上のようにイメージするならば、福原・六波羅・平泉・鎌倉などの群生をなぜ変革期ととらえないのかという批判が出るに違いない。この場合報告者は、例えば福原を、それが福原京と称された限りにおいて「都」のステージの部分的な変容形と考えようとし、例えば鎌倉を、大路・小路・辻子など、京都で用いられて来た、都の伝統を有する街路名の移入という側面から見る限りにおいて、「都」のステージの流れと位置づけようとした。また、例えば平泉では、農村と区別された独立の行政区は「平泉保」として扱われたといい（斎藤利男「都市平泉、その謎を解く」『月刊百科』1989—9, 10）、港町で商業都市として繁栄した中世山崎津も、いくつかの「保」から成っていたという。もしもこれらの「保」呼称の源流が、平安京における坊・保・町の保であるとすれば、やはり第1のステージを受けつぐ変容形態と見てよいのではないか、というふうに考えた。

上のメモに触れたように、両側町の普遍化は京都では15世紀末まで下ると考えられることもあるから、いわゆる中世の前半期は、せいぜい第1のステージの徐々たる変容の過程ととらえてよいのではないか、そして、その形が変革というに価するドラスティックな変わり方を経験する時期は、一連のいわゆる城塞都市の出現期ではあるまいかとしたのが、口頭報告時点の考えであった。

この考えの中には、京都について、社会史の観点から朝尾直弘が示した次の(i)~(ii)の変化も位置を占めていた。

(i) 永禄12年(1569)撰銭令、追加条令第7条「一銭定違犯之輩あらハ、其一町切ニ可為成敗、其段不相届ハ残惣町一味同心に可申付、猶其上ニ至ても手余之族にをいてハ可令注進、同背法度族於告知ハ、為褒美要脚伍百疋可充行之事」

(ii) 豊臣秀吉は天正15年(1587)・17年の二

度にわたり洛中検地を実施し、町ごとの屋敷地・畠地の別を把握した。

(イ) 天正18年の秀吉の町割は、前年までの検地で明らかにされた洛中の惣町がかかえていた農村的要素を切り離し、各町の都市としての純化を進めることで第二の段階を画したのであった。

(ロ) 天正後半期(1583-92)における洛中町数・戸口の急増。(「惣村から町へ」『日本の社会史6』1988年)

しかし、平安末～鎌倉初頭の一連の都市づくりにみられる変化を過小評価するのは、やはり無理があるかもしれない。鎌倉はやはり城塞都市というべきであろうし、その限りにおいてこれは全く新しい都市の出現である。また、その後平泉を訪ね、改めて福原の都市としての実態

を思いめぐらしてみたりすると、方位の正整の欠如、地形を生かした防備に対する配慮など、明らかに京の垂流と言ってしまされない新都市の存在形態が窺われる。さまざまな事実の整理・検討による「変革期」考察の必要が痛感されるのみである。

同様なことは、第3のステージに向けての、工業都市化、都市の外延的拡大(都市爆発)、再び街路によって囲まれる形態となる「町」の変化、サラリーマン社会化といった変化を通して見る「変革期」の考察に関しても言うことができるであろう。時代とテーマをしぼった形で、都市の変革を考える必要性を、今更ながら痛感した経験であった。

(京都大学教養部)